HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	命令文と話者の認識的立場
Author(s)	高橋, 英光
Citation	北海道大學文學部紀要, 38(1), 47-61
Issue Date	1989-09-16
Doc URL	http://hdl.handle.net/2115/33542
Type	bulletin (article)
File Information	38(1)_PL47-61.pdf

Instructions for use

Hokkaido University Collection of Scholarly and Academic Papers : HUSCAP

命令文と話者の認識的立場

高　橋　英　光
(文学部助教授)

0. 命令文の呼格と主語は見分けにくく混同されやすい。無論この二つが別物であることは，次のように共起できることから明らかである。

(1) Julie, you come with me.

また両者は生起する位置にも違いがあって，主語は文頭のみだが，呼格は文頭，文中，そして文末の位置をとることができる。

(2) My dear, come back soon.
Come back soon, my dear, with all your luggage.
Come back soon, my dear.

しかし，では文中の位置で区別ができないとき，例えば(3)の様に文頭に三人称の名詞句が生じているとき文頭の名詞句を呼格か主語かを決める基準は何であろうか。

(3) The boy in the corner get back to your seat.

一般に NP+VP (imperative) の名詞句はどの様な原理で呼格であったり，主語であったりするのであろうか。Quirk (1985 : 829) は (4) について呼格は a separate tone unit (Typically fall-rise) だが主語は ordinary word-stress であるとしている。

(4) MARY, play on MY side. (呼格)
Mary play on MY side. (主語)

Jespersen (1924 : 184) では，

(5) The close relation between the vocative and the nominative is

seen with an imperative, when "You, take that chair!" with *you* outside the sentence (exactly as in "John, take that chair") by rapid enunciation becomes "You take that chair!" with *you* as the subject of the imperative.

として文全体が早く発せられると呼格が主語になる，換言すると両者の違いは発音されるスピードにあるとしている。詳細において差異があっても Jespersen, Quirk に代表されるように名詞句の次に音調の切れ目があれば呼格，無ければ主語と言う理解が伝統的になされてきた。しかし Davies (1986: 135-6) はこの音調の切れ目が必ずしも当てにならないとして，(6) (b) の All of you が音調の切れ目を伴う事実から一義的に主語ではなく呼格であるとは決められないと言う。

(6) (a) All of you, whatever you're doing, should stop and listen to me.

(b) All of you, whatever you're doing, stop and listen to me.

一般に命令文に先行する名詞句の長さが長いとき音調の切れ目が生じ易いが，この事実は必ずしも長い名詞句が呼格であることを保証しない。文(7)の先頭の名詞句は音調の休止があっても主語的な振舞いを示している (See 1. 1)。

(7) Whoever wants to eat now| wash themselves/yourselves now.

つまり呼格は常に独立した音調単位を持つが，主語であっても時には独立の音調単位を持つことがある事になる。

(8) (a) NP VP (imperative) 主語のみ

(b) NP| VP (imperative) 呼格か主語

(8) によると文(3)の名詞句 the boy in the corner の後に音調の切れ目があっても常に呼格とは限らず主語もありうる事になる。

(9) (=3) <u>The boy in the corner</u>| get back to your seat.

呼格の文法—機能的特質について Curme (1931 : 152) は「他の語と文法関係を持たないが，人の注意を引く有益な目的を果たす」("...without grammatical relation to the other words, but serving the useful purpose of arousing the attention of someone.") と説明し，Quirk (1985 : 829) は，呼格に呼びかけ (call) と語りかけ (address) を区別するが，いずれにしても呼格は任意の要素であり「その任意性と位置の自由さの点で副詞語句的である」("...in its optionality and freedom of position, it is more like an adverbial (or, more precisely, like a disjunct ; ...) than any other element of clause structure") と言うが，命令文について興味深いのは主語も呼格と同様に任意であるため両者の文法—機能的役割が非常に接近している所にある。

呼格でも主語でも命令文にあっては話者が聞き手に話しかけていることには変わりがない。その直示的性格 (deixis) から命令文の基本は二人称であることは以前から指摘されている[1]。Jespersen (1931 : 148) はいかなる命令文も，たとえ見かけは「三人称」に呼び掛けている場合も含めて，事実上二人称であると明言し，以下の例をあげている。

(10) Oh, please, someone go in and tell her.
And bring out my hat, somebody, will you.

命令文において話者と聞き手が実質的に二人称の関係にあることは，呼格でも主語でも三人称代名詞が生じないことからも支持される。

(11) *He/*She/*They, go in and tell her.
*He/*She/*They go in and tell her.

この様にいずれも任意で，しかも同じ二人称の関係にありながら英語の命令文において対象を呼格で表現したり主語で表現したりする時には単に他の語句との文法関係の有無以上の対比があると思われる。命令文に関する研究は少なくなく，生成文法的アプローチから語用論アプローチへと変遷が見られるが，話者の発話過程からの研究は十分になされていない。本稿ではこの対

立を話者が聞き手との間に結ぶ関係のあり方に求められると仮定し，命令文の発話過程から見て，NP+VP (imperative) 構文の名詞句 NP が呼格か主語かを区別する原理を意味的・認識的側面から探ってみる。第一章では呼格と主語の各々に生じ得る形式と統語的或いは意味的振舞いを検討した結果，両者に DEICTIC 対 SYNTACTIC と EMOTIONAL 対 REFERENTIAL という二つの対比が認められること，そしてこの分類では説明し切れない言語事実がある事を指摘する。第二章では MOOD に於ける話者の現実的立場と非現実的立場とこの二つの立場の間の移行と言う理論を導入し，第一章で挙げた未解決の問題に適用を試みる。またこの提案が DEICTIC/SYNTACTIC, EMOTIONAL/REFERENTIAL と言う対比と矛盾がなく，幾つかの点で支持することを示す。

1.1 呼格と主語の対立—その (1)

you there が命令文に呼格では生じるが主語としては表れないという事実がある。

(12) a. You there, hold the door open.
b. *You there hold the door open. Schmerling (1975 : 503–4)

この there は "There they go!" の there と同じく DEICTIC であるが，呼格の you のみ直示の there と共起することから，呼格は主語より直示性が強いと仮定してみよう。この仮定によると (12) とは逆に直示性の低い，直示するのが難しい名詞句は呼格に相応しくないと言う予想をするがこの予想は次のような事実に合致している。つまり nobody/no one は主語には表れるが呼格では表れない (cf. Quirk (1984 : 830))。

(13) *Nobody/No one, move.
*Move, nobody/no one.
Nobody/No one move.

直示的な呼格に対して，非直示的な名詞句 nobody/no one が主語では表れることから命令文の主語を，次に明らかになる理由によって，統語的 (syn-

tactic) であると仮定しよう。

呼格はより直示的，主語はより統語的という仮定は次のような意味の対比からも裏づけられる。

(14) a. You, leave your bag here.
b. You leave your bag here.

呼格の you は非常に無礼で攻撃的な響きがあるが主語の you には必ずしもその様な響きがない (cf. Quirk (1985 : 828))。この you を you over there, you with a blue hat とすると響きが和らぐが以前として無礼さは残ることから，この意味現象は呼格の非統語性 (統語的独立性) 或いは直示性の相互作用と考えられる[2]。

呼格と主語の DEICTIC 対 SYNTACTIC の対比と関連すると思われるもう一つの現象は，代名詞の照応形の違いである。三人称主語の後では二人称と三人称の両方が可能であるが，三人称の呼格では二人称のみであることを多くの学者が指摘している[3]。

(15) a. Whoever wants to eat now, wash themselves/yourselves.
b. The boys/All the children in the front row stop their/your writing now and wash themselves/yourselves.
Downes (1977 : 81)

(16) a. Everyone, behave yourselves/*themselves.
b. Everyone behave yourselves/themselves.
Quirk et al. (1972 : 404)

(17) a. One of you lend a hand and make yourself/himself useful here.
b. One of you, lend a hand and make yourself/*himself useful here. Bolinger (1977 : 154)

(18) John, take off your/*his coat (John と his は同一指示)
Stockwell et al. (1973 : 641)

(19) Every mother's son of ye draw his knife, and pull with the blade between his teeth. *Moby Dick*

命令文主語に於ける二人称と三人称照応の間の動揺について Downes (1977 : 83) は統語的には their/themselves は三人称主語に照応し，語用論的には your/yourselves は状況的に聞き手を照応すると指摘しているが，発話過程の観点から，三人称照応と二人称照応とを次の例文で比べてみよう。

(20) (=3) a. The boy in the corner get back to his seat.
b. The boy in the corner get back to your seat.

Lyons (1977 : 660) に従って「照応代名詞はその先行詞が指示するものを指示する。」('an anaphoric pronoun refers to what its antecedent refers to') とすると, his も your も the boy in the corner が指示する物を指示する，すなわち his と言おうが your と言おうが the boy in the corner の対象と同じ対象を表すことになるが，話者の認識過程に即して言えば対象を his と表す時，明示的(言語的)主語の the boy in the corner を通して間接的に現実世界の実体をとらえている一方で (b) の your は主語の the boy in the corner を通さずに直接，現実世界の実体を知覚していると想定するのが妥当である。主語では (a) (b) 共に可能であるが呼格では (b) のみ許されるという事実は，主語では対象を DEICTIC にも SYNTACTIC にもとらえることができるが，呼格は間接的なとらえ方ができないと言う点で DEICTIC である事を示唆している。

1.2 呼格と主語の対立—その (2)

NP＋VP (imperative) の NP に生じる名詞句は，呼格か主語かで対比が見られる。例えば dear は呼格として生起するが主語には生じない。

(21) Come home, dear.
*Dear come home. Quirk, et al. (1985 : 775)

その他 handsome/beautiful/(my) sweetie-pie (Am E)/honey (Am E)/buttercup (Am E)/mister/stupid/bastard/coward は呼格に生じるが主語には不適当である。

(22) a. Take off your hat, handsome/beautiful/(my) sweetie-pie/ho-

ney/buttercup/mister/stupid/bastard/you coward.

b. *Handsome/*Beautiful/*(My) Sweetie-pie/*Honey/*buttercup/*Mister/*Stupid/*Bastard/?You coward take off your hat.

(21) と (22) の名詞句はすべて感情的な主観的色彩の強い表現であると言う事ができる事から呼格はより emotive, subjective な名語句が相応しいと仮定できると思われる。ただし上の例には語順の問題も関わっている可能性がある。たとえば同じ呼格でも文末と文頭では文末のほうが使われる頻度が高く情報構造の原理も関わっている。しかし呼格であるかぎり文頭でも使われるし，強意的表現に先行されれば尚更自然である。

(23) a. Handsome/Bastard/You coward, take off your hat.

b. For heaven's sake, handsome/bastard/you coward, take off your hat.

一方主語は相変わらず不適当である。

(24) For heaven's sake, *handsome/*bastard/?You coward take off your hat.

(21)–(24) からやはり命令文主語に比べて呼格は感情性，主観性が強いという仮定は正しいと思われる[4]。

さてこの仮定は逆に主語は呼格と比べて感情性，主観性が低く，客観的対象指示性が強いことを示唆するから，命令文の対象が誰であるか明白で誤解が起こり得ない場合，主語を言うのは奇妙であると予測するが，この予測は次の事実と一致する。(25) も (26) もいずれも my son, father と呼ばれている人物と話者が向かい合っているならば主語として言うことができない。

(25) a. My son, don't lie to me.

b. *My son don't lie to me.

(26) a. Trust me, Father.

b. *Father trust me.

命令文主語が主語本来の機能である指示性が強いことから，指示の目的上全

く不必要な場面では主語の生起は結果として不適格な文を産むことは次の例からも確認される[5]。

(27) *John hold the door open.
John, hold the door open. Schmerling (1975 : 503)

(28) *John close the door, will you ?
John, close the door, will you ? Downing (1969 : 578–9)

(27) も (28) も話者が John と向かい合い，他に聞き手がいない場面では主語を加えるのは余剰的である。このことは逆に命令文の対象となる聞き手が他にもいるため referential に主語を明示的にする必要がある場面では固有名詞主語が表れるのが全く自然でかつ必要であることからも明らかである。

(29) John scatter the files, Bill ransack the desk, and I'll watch the door. Downing (1969 : 579)

(30) Rob take the box and Dave bring the suitcase.
Davies (1986 : 142)

以上をまとめると命令文の文頭に生じる呼格はより主観性の高い，話者指向的な名詞が好ましく，一方主語には話者指向性の低い，対象指示性の高い名詞句が選ばれる傾向があることが明らかになったが，この対比は絶対的なものではなく，相対的な対比と考えられるべきものであろう[6]。

上の観察の自然な結果として同一の名詞句が命令文に呼格として生じる時と，主語として生じている時とを比べると微妙な意味の差が存在すると仮定できる。

(31) a. The boy in the corner/you, come with me.
b. The boy in the corner/you come with me.

(32) a. Rob, take the box and, Dave, bring the suitcase.
b. Rob take the box and Dave bring the suitcase.

(31–32) の呼格 (a) の the boy in the corner, you, Rob, Dave はそれぞれ主語 (b) の場合より感情性，話者指向性が強く，逆に主語では対象指示性が強く，話者の感情性は弱いと考えることができる[7]。

1.3 前の節では，命令文の呼格と主語に deictic/syntactic, emotional/referential と言う対立があることを見たが，これらの対立に収まりきらないと思われる言語事実として，主語に限り聞き手以外の者も含めることができるという現象がある。

(33) a. You and William do the cooking and I'll provide the wine.
b. You and your men keep watch on the left while I get into position on the right.
c. Your men guard the front while we creep round to the back. Davies (1986 : 141)

さらに you 主語付きの命令文と共起する文脈で，主語が純粋に三人称のみを表す用法も知られている。

(34) a. You go for help and the children stay here with me.
b. You make the dinner and John do the washing up. No? All right then, John cook and you wash up.
Davies (1986 : 141)
c. No ; you get the paper and pencil and the catalogue, and George write down, and I'll do the work. (Go call him, will you ; and tell him we need him and what he's supposed to do.) Bolinger (1977 : 175)

(34) c について Bolinger は George が "within earshot" である必要は無いと説明している。

一方，呼格では (33), (34) のいずれも不可能である。その場にいない William や，your men はたとえ you と並列しても呼格で呼ぶ事ができない。

(35) a. You and *William, do the cooking and ...
b. You and *your men, keep watch on the left ...

その場にいない the children や，John や，George は，単独で呼格で呼ぶことはなおさらできない。

(36) a. You go for help and, *the children, stay here with me.

b. You make the dinner and, *John, do the washing up. No? All right then, *John, cook and you wash up.

以上の事実について Davies (1986 : 141-2) は呼格が聞き手を指示しなければならないと言う制限は絶対的であると指摘するが，なぜ呼格ではこの制限が絶対的で，一方なぜ主語では聞き手の指示の制限が弱いのかについては両者の基本的な伝達機能の違いとして解釈するに止どまり，話者と聞き手の関係のあり方からの原理的な説明が十分に与えられていない。

また Hamblin (1987 : 53) では聞き手以外のものに向けられているが先行する you 付き命令文がない (37) のような興味深い呼格付き三人称命令文の例がある。

(37) B Company deploy on the escarpment, Lieutenant.

この場合呼び掛けられている人は命令を行為者へ伝えることが期待されており，論理的主語 (logical subject (s)) と呼格の対象者 (referent (s)) との不一致の例として説明しているが[8]，Hamblin においてもなぜ呼格より主語が指示対象の範囲が広いのかについての原理的な説明がない。

これらの事実は前にあげた話者と聞き手は常に実質的には二人称の関係という命令文の基本原則に違反していると思われるが，これらを事実上の三人称として認めるべきであろうか。命令文においてある特定の文脈で実質的三人称は有り得るのであろうか。統語的には三人称の名詞句が発話されたとき，それが見掛けの三人称かそれとも実質的な三人称かを判断する有効な方法は三人称代名詞による置き換えが可能かどうかを調べることである。これによると (33) (34) (37) の三人称主語の代名詞による置き換えは対応する名詞句に比べ文の容認性を著しく低くする[9]。

(38) a. You and ?he do the cooking and ...
b. You and ?they keep watch on the left ...

(39) a. You go for help and ?they stay here with me.
b. You make the dinner and ?he do the washing up. No? All right then, ?he cook and you wash up.

(40) ?They deploy on the escarpment, Lieutenant.
(? は全て命令文としての容認性判断を示す。)

このテストから一つの矛盾した観察ができると思われる。つまり命令文の主語にはある文脈で聞き手以外の者，つまり三人称を含むことができるが，しかし代名詞のテストによると実質的に三人称とは認め難い。またここで注意したいのは上の三人称主語の命令文は二人称主語を含む文脈の中で生じ易い事実である。以上この節では主語でのみ起こりうる第三者に対して発せられる命令文を扱ったが，この一見例外的な用法はこれまでの議論で提案された主語の統語性と対象指示性では合理的な説明ができない。これまでの議論では主として呼格と主語の統語的・意味的な振舞いの相違を検討してきたが，話者の側の条件については十分な観察をしなかった。そこで次章では mood の一つとして命令文の性格を取り上げながら，発話過程における話者の側からの呼格と主語の対比を検討し，上記の純粋三人称主語の問題と DEICTIC 対 SYNTACTIC 及び EMOTIONAL 対 REFERENTIAL の対比を再考することにする。

NOTES

＊本稿を作成するにあたりインフォーマントとして有益な助言を下さった Michael Carr, Susan Glandier, Willie Jones 各氏に感謝の意を評します。

1 Thorne (1966) は変形的に命令文の表層の名詞句は深層で全て呼格の you であるとした。Katz-Postal (1964) も命令文の深層構造に you を設定した。これに対して Bolinger (1977) と Downes (1977) の実証的な観点からの批判がある。変形的アプローチの欠点は現実世界の実体としての聞き手を言語的 you に還元してしまい，話者が聞き手に対して様々なとらえ方をする過程を無視するところにある。

Palmer (1986 : 111) は "It may be best to restrict the term 'Imperative' to 2nd person forms and to use 'Jussive' for the others." とし三人称命令文を認めないが，例えば "Help me quick!" を命令文と認める一方で "somebody help me quick!" を命令文と認めないのには無理がある。Pal-

mer にも文法的二人称形 (REFERENCE) と現実世界の二人称関係 (REFERENT) の混同があると思われる。文法的人称と現実界の人称との不一致の例は日常の言語使用でしばしば観察される。次の例では話者は自己 (現実界の一人称) を言語的には三人称で表している (cf. Langacker (1986 : 131))。

(i) The person uttering this sentence is quite intelligent.
(ii) Don't lie to your mother! [said by Mother to Child]

2 Those near the front/Those in the row については個人差があるが，一般に主語に比べ呼格は好まれない。この名詞句のもつやや非感情的な客観的記述が人間に呼び掛けるのに適さないと感じられるためと思われる。

3 ただし二人称主語と三人称主語が並ぶ場合は二人称照応のみ可能である (Downes (1977 : 83))。

(i) You the students in the corner stop writing your/*their essays and wash yourselves/*themselves.

また (ii) が不適格なのは you が意味的に定 (definite) であるため不定表現が後続するのは論理的に矛盾するためと思われる。

(ii) *You everyone/anyone/someone who wants to leave now get yourself ready.

4 H. Melville, *Moby Dick*, 48 *The first lowering* では stubb が乗員を次のように様々に多彩な呼格で語りかけている。

"...Pull, pull, *my fine hearts-alive*; pull, *my children*; pull, *my little ones*. ...Why don't you snap your oars, *you rascals*? Bite something, *you dogs*! ...The devil fetch ye, *ye ragamuffin rapscallions*; ...Stop snoring, *ye sleepers*, and pull. ...Now you do something; that looks like it, *my steel-bits*. Start her-start her, *my silver-spoons*! Start her, *marling-spikes*!..."

これらの名詞句はいずれも聞き手を客観的に指示する為ではなく話者の感情や主観を押し出したものであり，主語としては使いにくい物が多いと思わ

れる。

5　Quirk et al. (1985 : 773) は呼格の機能を call と address に二分し，前者は呼びかけている人(々)の注意を引きつけ，そこにいる他の人々の中から選り抜く物で，後者は話している相手への話者の関係や態度を表すとしているが，この区別は連続的なものであり少なくとも命令文においては address のみならず call の呼格においても主語と比べてより話者指向的と考えられる。

6　呼格に冠詞が不要なのはその話者指向性と深い関係があると思われる。冠詞は範疇化する表現なのでより冷静な対象指示に相応しく，一般に親愛や軽蔑など呼格が感情的な内容になるほど話者は対象を範疇化する余裕はなく，無冠詞の名詞句，形容詞が生じ易い。

7　言語の意味を話者主体性と客体性の両面性と見る方法は時枝 (1941), 三浦 (1967), 三浦 (1976) に展開されている。吉本 (1965 : 54) では日本語の品詞を自己表出性と指示表出性の二つの軸から成る座標軸に並べ，感動詞を前者の極にして，助詞，助動詞，副詞，形容詞，動詞，代名詞を続け，名詞を後者の極に位置ずけている。

本稿の議論から同一の名詞が間投詞，呼格，主語として命令文と共起するとき，間投詞は話者指向性の極に近く，主語は対象指示性の極に近く，呼格はその中間に位置すると想定できる。

(i)　a.　Boy! it's over at last.
　　b.　Don't be shy, boys.
　　c.　All the boys come with me.

8　Hamblin (1987 : 52–3) は命令文に係わる人間関係を下のように明解に分類し，通常は (c)=(d)=(e) だが，(c)≠(d) の場合があるし，三人称命令文では二人称命令文と異なり (e) が必ずしも (c) と同一とならないと指摘する。

(a)　the issuer
(b)　the group for which he is spokesman
(c)　addressee (s)
(d)　referent (s) of a vocative, if any

(e) logical subject(s)

9 この判定には個人差がみられ，命令文主語の he/she/they を容認する人も希にいる。しかしこれらの三人称代名詞主語を認める人も次の様に will がつく未来形をより自然であると判定する。

(i) ?You make the dinner and he do the washing up.
(ii) You make the dinner and he *will* do the washing up.

また逆に (iii) のような文脈で，will 付きの未来形のみ許容する話者もいる。

(iii) a. You go for help and the children *will* stay here with me.
b. You play the guitar and Mary *will* play the piano.

文法性の判定に個人差がある時にはより寛容な判断を認める方が記述的な研究態度と思われるので我々は (iii) のような文脈での三人称命令文 ('...the children stay here with me./...Mary play the piano.) を容認する立場を取る。

References

Bolinger, D. L. 1977. *Meaning and Form.* London: Longman.

Culicover, P. W. 1976. *Syntax.* New York: Academic Press.

Curme, G. O. 1931. *Syntax.* Boston: D. C. Heath and Co.

Davies, E. E. 1986. *The English Imperative.* London: Croom Helm.

Downes, W. 1977. "The Imperative and Pragmatics," *Jounal of Linguistics* 13, 77–97.

Downing, B. T. 1969. "Vocatives and Third-person Imperatives in English," *Papers in Linguistics* 1, 570–91.

Hamblin, C. L. 1987. *Imperatives.* Oxford: Basil Blackwell.

Harada, S. I. 1971. "Where do vocatives come from?" in *English Linguistics* 5. Kitakusha., 2–43.

Huddleston, R. D. 1984. *Introduction to the Grammar of English.* Cambridge: Cambridge University Press.

———. 1988. *English Grammar: an outline.* Cambridge: Cambridge University Press.

Jespersen, O. 1924. *The Philosophy of Grammar.* London: George Allen and Unwin.

———. 1933. *Essentials of English Grammar.* London: George Allen and Unwin.

Jespersen, O. 1954. *A Modern English Grammar on Historical Principles, Part 5.* London: George Allen and Unwin.

Katz, J. J. and Postal, P. M. 1964. *An Integrated Theory of Linguistic Descriptions.* Cambridge: MIT Press.

Langacker, R. W. 1987. *Foundations of Cognitive Grammar. Volume 1 Theoretical Prerequisites.* Stanford: Stanford University Press.

Levenston, E. A. 1969. "Imperative Structures in English," *Linguistics* 50, 38–43.

Lyons, J. 1977. *Semantics, Volume* 2. London: Cambridge University Press.

三浦つとむ 1967. 『認識と言語の理論』勁草書房.

——— 1976. 『日本語はどういう言語か』講談社.

Palmer, F. R. 1979. *Modality and the English Modals.* London: Longman.

———. 1986. *Mood and Modality.* Cambridge: Cambridge University Press.

Quirk, R., Greenbaum, S., Leech, G. N. and Svartvik, J. 1972. *A Grammar of Contemporary English.* London: Longman.

———. 1985. *A Comprehensive Grammar of the English Language.* London: Longman.

Schmerling, S. F. 1975. "Imperative Subject Deletion and Some Related Matters," *Linguistic Inquiry* 6, 501–11.

———. 1982. "How Imperatives are Special, and How they aren't," *Papers from the Parasessions on Non-declaratives, Chicago Linguistic Society.* Chicago: The University of Chicago Press., 202–18.

Schreiber, P. A. 1972. "Style Disjuncts and the Performative Analysis," *Linguistic Inquiry* 3, 321–47.

Stockwell, R. P., Schachter, P. and Partee, B. H. 1973. *The Major Syntactic Structures of English.* New York: Holt, Rinehart and Winston.

Takahashi, H. 1981. "On So-Called Speaker-Oriented Adverbs" *The Annual Report of Cultural Science* 30–1. The Faculty of Letters, Hokkaido University., 105–22.

Thorne, J. P. 1966. "English Imperative Sentences," *Journal of Linguistics* 2, 69–78.

時枝誠記 1941. 『国語学原論』岩波書店.

吉本隆明 1965. 『言語にとって美とはなにか　第1部』勁草書房.